神戸女学院大学論集　第68巻第１号　Kobe College Studies Vol. 68 No. 1（June 2021）pp. 103-117

小史・日本の家族社会学におけるエスノメソドロジー・会話分析の展開

― 1990年代から2010年代まで ―

戸　江　哲　理

EMCA-Informed Research in Family Sociology in Japan: Overviewing the First Three Decades

TOE Tetsuri

神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 准教授
連絡先：戸江哲理　toe@mail.kobe-c.ac.jp

要　旨

エスノメソドロジー・会話分析と家族社会学が交わるところで、これまでに日本でなされてきた研究を概観した。具体的には、1990年代から2010年代までの成果物をテーマ、手法、著者などから十年刻みで整理した。1990年代には、家庭での親による子どもの社会化の研究にエスノメソドロジーの知見を活かしながら取り組んだ教育社会学者たちがいた一方、家族の定義をめぐる論議においてエスノメソドロジーの発想を援用した家族社会学者たちもいた。2000年代に入って、若手の家族社会学者たちが主に成員カテゴリー化装置の発想を用いて家族をめぐる具体的なデータの検討に着手した。2000年代の後半になると、子育て支援をフィールドとして、エスノメソドロジー・会話分析の方法論や知見を活かす研究がなされるようになった。インタビュー調査によるものや、やりとりを検討するものである。2010年代に研究は拡大し、エスノメソドロジー・会話分析から示唆を受けた研究者たちの単著が刊行され、エスノメソドロジー・会話分析を活かして取り組まれるテーマや用いられるデータの種類などにも厚みが出てきた。だが、研究の余地は依然として大きい。

キーワード：エスノメソドロジー・会話分析、家族社会学、学説史

Abstract

This is an overview of the first three decades of the family sociological research in Japan which is influenced by Ethnomethodology and Conversation Analysis (hereafter EMCA). Some Japanese sociologists of education started to analyze interactions between parents and children from the perspective of EMCA in the 1990s (e.g., Seiya 1994). A few family sociologists inspired by EMCA followed by using its methods to examine 'what is family?' (e.g., Tabuchi 1996). The 2000s saw some young family sociologists published empirical studies using EMCA (e.g., Kashida and Terashima 2003). They featured analysis of membership categorization devices, combining EMCA with social constructivism. CA-based studies of interactions between mothers who gathered in child raising support places (*kosodate hiroba*) also appeared in the same decade (Toe 2007, 2008). Throughout the 2010s, some monographs of family sociology influenced by EMCA, including Kido (2010), Matsuki (2013), and Kinoshita (2019) were published as well as an ethnography of *kosodate hiroba* (Toe 2018). At the same time, more various fields of research in family sociology were approached in light of EMCA during the 2010s. For instance, conferences between family members and care managers of elderly persons were analyzed by using CA (Nakagawa 2016). Moreover, the 2010s saw innovations in research methods for doing research in EMCA in family sociology. For an example, Fujiwara (2011) described the use of membership categorization devices in texts in leaflets for preventing suicides. To conclude, these thirty years has brought steady development to EMCA in family sociology in Japan. However, vast uncharted fields of family sociology await us to explore by using EMCA methods in the decade to come.

Keywords: Ethnomethodology and Conversation Analysis, family sociology, history of studies

1　家族社会学とエスノメソドロジー・会話分析の30年史

本稿は、過去30年間の、日本の家族社会学におけるエスノメソドロジー・会話分析の研究の蓄積を概観しようとするものである。エスノメソドロジー・会話分析が生まれてからすでに半世紀以上、その重要な論文数本をそれぞれ収めた訳書２冊、『エスノメソドロジー――社会学的思考の解体』（1987年）と『日常性の解剖学――知と会話』（1988年）が1980年代終盤に相次いで出版されたことをもって、日本のエスノメソドロジー・会話分析のひとつの画期とするなら、そこからでも三十余年の歳月が経過している[1)]。

その年数に比すれば、依然として数は少ないものの、エスノメソドロジー・会話分析に関心を寄せる家族社会学者も一定数は存在するし、エスノメソドロジー・会話分析を専門とする者の一部が家族社会学の領域へと踏み出すようにもなってきた。

情勢をこう捉えたとき、家族社会学とエスノメソドロジー・会話分析が交わるところでいつ誰がどんなテーマに取り組んできたのか、それらはどう移り変わってきたのかを、おおまかにでも整理しておくことは、これまでの研究の到達点を見定め、その今後を展望するうえで一定の意義をもっているように思える。本稿はその作業を行おうという、ささやかな試みである。

とはいえ、本稿を読み通すとわかるように、エスノメソドロジー・会話分析と家族社会学の積集合にふくめられる研究はあまりにも少ない[2)]。そこで本稿では範囲をやや広げて、両者の和集合のうち、積集合近辺にプロットできる研究もふくめることにしたい。すなわち、エスノメソドロジー・会話分析的な研究そのものではなくとも、その影響を受けたことが明らかな家族社会学的な研究、逆に家族社会学的な研究とはいえなくとも、家族の研究とはいえるエスノメソドロジー・会話分析的な研究も取り上げることにしたい。

すぐ後で述べるように、管見のかぎりでは家族社会学とエスノメソドロジー・会話分析が交差する日本の研究が登場するのは、1990年代に入ってからである。そこで、本稿ではそれ以降の研究史を概観する[3)]。

2　1990年代――新たな視座としての受容

2.1　家庭での子どもの社会化を捉え直す視座

論文として公刊されたものを調べるかぎりでは、1990年代まで家族社会学者はほとんど沈黙を守り続けていたように思える[4)]。家族社会学的な領域において、エスノメソドロジーの知見を活かした研究に先んじて着手したのは、むしろ教育社会学者たちだった。すなわち、家族社会学と教育社会学がお互いに乗り入れる研究トピックといえる、子どもの社会化のエスノメソドロジー的な研究に一部の教育学者たちが取り組んでいたのである。教育社会学では1980年代に「新しい教育社会学」のうねりが日本にも押し寄せ、「解釈的アプローチ」の一流派と位置づけられたエスノメソドロジーに関心を寄せる研究者たちが現れていた[5)]。そのなかで1990年代に入ると、親による子どものしつけにかんする、データにもとづく研究の成果が出はじめる。

清矢良崇（1994）はその代表的な成果のひとつである。高校受験を控えた息子がいる家庭での録音を認めてもらい、両親が受験勉強に精を出すように息子を説教し、ときに彼が涙する様子が検討されている。この研究のねらいは、子どもの社会化は規範の内面化であるという図式（Parsons 1956＝2001）に則り、その実際的なプロセスを詳らかにすることだった。この時期の研究成果として、会話分析の知見がやりとりの検討に活かされている気配はないが、叱るという行為に対しては沈黙することが適切な反応になるという興味深い指摘もなされている。

教育社会学者による家庭内のしつけの研究として、もうひとつ、石飛和彦（1996）も挙げておきたい。この論文の前半は、電車のなかで母親が幼い息子に対して、車内のマナーを教えるやりとりが検討されている。ここまでは清矢（1994）と似ているが、この論文の後半では、やりとりの検討をふまえた理論的な考察に移り、規範の内面化（が社会秩序をもたらす）という従来的な社会化論自体を批判的に検討している点で、より徹底的にエスノメソドロジーに依拠するスタンスが示されている[6)]。

2.2　家族の定義論への新たな視座

これらの研究はだが、あくまでも教育社会学というディシプリンの内側のできごとだったように思える。というのも、これらに言及した同時代の家族社会学者の論考が見当たらないのだ。家族社会学的なテーマにかかわるエスノメソドロジー・会話分析的な研究がなかったわけではない。同時期にエスノメソドロジー・会話分析を活性化させていた、好井裕明と山田富秋によって編まれた2冊の本、『エスノメソドロジーの現実』（1992年）と『エスノメソドロジーの想像力』（1998年）には、それぞれ山田昌弘と草柳千早が寄稿している（草柳 1998；山田昌弘 1992）。今日的な視点からすると、この2人がエスノメソドロジーの名を頂いた論集に執筆していたこと自体に、いささかの驚きを覚えるだろう。

草柳（1998）は、夫婦別姓をめぐる当時の論争について社会的構築主義のアプローチから論じるなかで、当時すでに和訳が出ていたメルヴィン・ポルナー（Pollner 1975＝1987）の知見を一部援用したものである。力点は明らかに社会的構築主義のほうにある。

これに対して山田昌弘（1992）が、エスノメソドロジーに期待したものは、家族社会学に対するいわば知識社会学的な効果だった。たとえば、ペットを家族だと考えている人が現実には大勢いるが、従来の家族社会学（者）による家族の定義は、この現象を射程に収めることができていない。人々がどのように知識を運用して、現実をつくり上げているのかを明らかにするエスノメソドロジーは、家族社会学者たちがどのように学術的な家族の定義を生み出してきたのかを明らかにする一方、市井の人々がどのように家族を捉えているのかを明らかにできるのではないか――そう期待したわけである。そのうえで、「現実の相互作用の中で、家族のとらえ方がどのように用いられているのかをあきらかにすること」を、エスノメソドロジーが家族研究に寄与しうるテーマとし（山田昌弘 1992：156）、「会話分析などは、家族社会学でもっとも豊かな成果をあげられる方法だと思われる」（山田昌弘 1992：157）とすら述べている。本稿でこれからみていく、その後の研究動向に照らしても、これは達見だったといってよい。

もっとも、山田昌弘（1992）の後半では、家族の代替不可能性などから家族の本質規定に踏

み込んでいって、最終的にはエスノメソドロジーの発想から遠ざかっていく。彼にとってエスノメソドロジーは、自身のオリジナルな理論を発展させる、いわば「触媒」のようなものだったのかもしれない。

その後、山田昌弘（1992）を部分的に引き継ぎながら、当時の若手研究者たちが家族社会学における家族の捉えかたをめぐる理論的・抽象的考察を展開したが（木戸 1994, 1996；田渕 1996）、それらもまた正面切ってエスノメソドロジーを標榜するものではなく、エスノメソドロジーの位置づけは思考を深めるうえで有益な源泉のひとつといったところだった。家族社会学者が本格的に眠りから覚めるには21世紀を待たねばならなかった。

3　2000年代――アイディアの膾炙と経験的研究の萌芽

3.1　エスノメソドロジー・会話分析への接近

2000年代に入ってすぐ、2001年にエスノメソドロジー・会話分析の章を設けた家族社会学の編著が出版された。『家族社会学の分析視角』（野々山・清水編 2001）である。タイトルどおり、家族社会学的研究の理論・方法論のレパートリーを網羅的に紹介した本書には、ジェンダー論、ストレス論、家族史、人口学などと並んで、樫田美雄の手になる「エスノメソドロジー的アプローチ」の一章がある（樫田 2001）。

樫田（2001）は、紙幅の多くをいわゆる「アグネス論文」（Garfinkel 1967＝1987）の紹介に割いており、内容としてはむしろジェンダー論に対するエスノメソドロジーの意義をアピールするものといってよい[7)]。だが論文の終盤では、119番通報のやりとりにおいて、通報を受けた側が、通報した側とのやりとりを、夫婦の役割という常識的知識にもとづいて進めているということも論じられている。

また、2000年代になると、若手研究者を中心にエスノメソドロジー・会話分析の知見を活かした研究がなされはじめる。社会的構築主義からの家族研究のまとまった成果、『家族とは何か』（Gubrium and Holstein 1990＝1997）の和訳が1997年に公刊されたことが、その呼び水となったことは衆目一致するところだろう。エスノメソドロジー・会話分析の知見を活かした社会的構築主義という立場からのこの本は、以下で紹介する研究成果でも必ずといっていいほど言及・引用されている。本書を通じてエスノメソドロジー・会話分析とその家族社会学に対する寄与のポテンシャルを知り、関心を寄せるようになった家族社会学者が少なくなかったことが窺えよう[8)]。エスノメソドロジー・会話分析は、社会的構築主義に係留されて日本の家族社会学に受容されていったのである。それを象徴するように、2001年に刊行された松木洋人（2001）のレビュー論文は「社会構築主義と家族社会学――エスノメソドロジーの知見を用いる構築主義の視点から」と題するものだった。

2003年に早稲田社会学会の『社会学年誌』で組まれた特集、「家族研究における質的方法の新たな展開」はその意味でひとつのマイルストーンともいうべきものだった。ここには、木戸功・松木洋人（2003）と樫田美雄・寺嶋吉保（2003）という２本のエスノメソドロジー・会話分析の知見を活かした、かつ思弁的にではなく、具体的なデータにもとづく研究が収められていたからである。

２本の論文のうち、木戸・松木（2003）では、『家族とは何か』（Gubrium and Holstein 1990＝1997）の著者たちがエスノメソドロジーから示唆を受けていることを確認し、それゆえにエスノメソドロジー・会話分析に則った家族研究が可能だと主張する。そのうえで、会話分析の創始者、ハーヴィー・サックス（Sacks 1972a, 1972b）の「成員カテゴリー化装置」（membership categorization device）のアイディアを紹介し、それが家族研究にとってもつ意義を強調する。最後に、夫婦の短いやりとりを検討することで、そこに夫婦としての規範が立ち現れていることを指摘している。

もう一本の樫田・寺嶋（2003）は、病院の診察室で録画されたやりとりを分析したものだ。診察室には医師と患者、そしてその妻がいる。医師は来るべき手術に伴うリスクを説明し、同意を得ようとしている。このとき、妻は黙ってその場に座っているだけではない。夫と同じように医師に質問し、医師も妻に向かって話すこともある。妻はまさに患者の妻という立場にある者としてふるまうことで、それを可能にしている。そのような分析がなされている。

こうして、家族社会学におけるエスノメソドロジー・会話分析の研究は実質的な歩みを始める。ここで３つのポイントを指摘できる。１つ目は前節で述べたことの確認になるが、1990年代に教育社会学者たちが行った、親による子どものしつけのエスノメソドロジー研究からの影響がほとんど認められないことである。先行研究として引用されていないし、研究テーマ自体も一方は子どもの社会化、他方は夫婦関係と大きく違っていた。

２つ目はまだこの時点では、ひとつの論考のなかで、データの分析に比してのエスノメソドロジーそのものの消化と紹介の比重がかなり大きかったことである。紹介した３本の論考のうち、樫田・寺嶋（2003）はデータの分析が主となったものだが、樫田（2001）は（アグネス論文の紹介を主とした）エスノメソドロジーの概説が９ページ弱あるのに対して119番通報のデータの分析は３ページ弱、木戸・松木（2003）はデータの分析が４ページで、それに先立つ方法論の紹介が10ページとなっている。

３つ目のポイントは、その具体的なデータの分析において、成員カテゴリー化装置のアイディアが高く評価されていることである[9)]。逆に、順番取得組織、行為の構成、行為の連鎖をはじめとする、会話分析の主だった研究トピックからの知見はほとんどデータの分析に活かされた形跡がない。

その背景にある要因のひとつと考えられるのは、成員カテゴリー化装置と家族という対象との親和性である。現に、サックス自身が成員カテゴリー化装置の具体例として家族を取り上げている。また当時、その成員カテゴリー化装置のアイディアを独自に発展させた、「成員カテゴリー化分析」（Hester and Eglin 1997）が日本にも紹介されつつあったことも、それを後押ししただろう。

要因をもうひとつ挙げるなら、2000年代前半という時期は日本のエスノメソドロジー・会話分析にとって、西阪仰や串田秀也といった現在の日本の会話分析を代表する研究者たちが、海外の研究者を招いたりもしながら、自らの修練と後進の育成に取り組みはじめたばかりの時期だったということもあるだろう[10)]。そこで学び、しかも家族社会学を専門とする研究者が登場するのは2000年代も終盤に差しかかってからである。

3.2　エスノメソドロジー・会話分析を軸足とする研究の登場

2000年代も後半になると、エスノメソドロジー・会話分析の成果を咀嚼したうえで、家族をめぐる経験的な研究を行う、若手の研究者たちが現われはじめる。松木洋人が、子育て支援の現場で働く人々へのインタビュー調査にもとづいて、社会的構築主義とエスノメソドロジー・会話分析を折衷させた立場から論文を発表しはじめる（松木 2005, 2012）。また私自身が、子育てひろばでのフィールドワークに取り組み、そこでの母親どうしのやりとりについての会話分析的な研究の成果を発表しはじめたのもこの頃だった（戸江 2008a, 2008b, 2009, 2012）。

松木の論考は全体として、子ども家庭支援センター（松木 2005）や子育てひろば（松木 2012）といった、タイプの異なる子育て支援の現場で働くスタッフたちの語りから、彼女たちが「子育ては社会全体で担うべきだ」という理念と「子育てはまずもって家族が担うべきだ」という理念の相剋を、その日々の子育て支援の実践において、どんなふうに折り合いをつけているのかを明らかにしようとするものだった。

対して私の一連の研究は、対象としてはもっぱら子育てひろばに定位して、育児不安を和らげ、育児ネットワークをつくるチャンスを提供するという子育てひろばのねらい、あるいは子育てひろばの「和やかな雰囲気」が、母親どうしのやりとりを通じてどのように具現化されるのかを明らかにしようとするものだった（戸江 2018a）。すなわち、そこでは（ときに初対面の）母親たちがやりとりをはじめるやりかた（戸江 2008a, 2012）、子どもや子育ての悩みを分かち合い、助言し、それに応答するやりかた（戸江 2008b）、そして、これらのやりとりを通じて、母親どうしが親しくなっていくやりかた（戸江 2009）が詳らかにされている。

両者はどちらも子育て支援をフィールドとした研究を進めたが、用いる方法論とそこでのエスノメソドロジー・会話分析へのコミットメントの度合いは違っていた。すなわち、松木の研究がもっぱらスタッフの語りをデータとして、その検討にエスノメソドロジー・会話分析の知見を応用しているのに対して、私の一連の研究は子育てひろばの普段の様子を録音・録画したやりとりのデータを、会話分析の方法論に則って検討したものだった。また、この動きは子育て支援に限定的なもので、他の家族研究のフィールドでの同じような立場からの研究成果は、この時点ではまだ現れていなかった[11)]。

4　2010年代――経験的な研究の広がり

4.1　概念分析のインパクトと方法論的な広がり

2010年代に入ると、2000年代に社会的構築主義を通じてエスノメソドロジー・会話分析の理解を深めた家族社会学者たちがモノグラフを刊行するようになる。すなわち、木戸功が2010年に『概念としての家族』（木戸 2010）を、松木洋人が2013年に『子育て支援の社会学』（松木 2013a）を、そして木下衆が2019年に『家族はなぜ介護してしまうのか』（木下 2019）を刊行する。

この３冊が順に世に出た10年間は、社会的構築主義とエスノメソドロジー・会話分析の関係が徐々に変化した時期だった。一方でそれは、松木（2014）が「アプローチの空疎化」と呼ぶように、社会的構築主義が期待されたほどには経験的な研究、すなわち調査にもとづく研究の

蓄積を家族社会学にもたらさないまま、しだいに退潮していった時期だった。

他方でそれは、日本のエスノメソドロジー・会話分析においてエスノメソドロジーの「概念分析」としての側面をアピールする運動が台頭した時期でもあった（酒井ほか編 2009）。そのムーブメントは、エスノメソドロジー・会話分析の経験的な研究が、（日本でも徐々に成果を収めつつあった）会話分析に限定されないことを知らしめることに成功し、エスノメソドロジー・会話分析に関心をもつ研究者の裾野を広げることに貢献した。『概念分析の社会学』（酒井ほか編 2009）が版を重ね、あまつさえ続編（酒井ほか編 2016）も刊行されたことが、そのインパクトの大きさを物語っている。家族社会学にもその波は押し寄せ、木下（2019）は社会的構築主義と概念分析を独自に融合させた枠組みからのエスノグラフィックな研究に仕上がっている。

これらのモノグラフは、障害者支援（木戸 2010）、子育て支援（松木 2013a）、そして認知症介護の自助グループ（木下 2019）と、どれも家族支援の現場を研究対象としているという、表面的な共通性をもつ。より本質的な共通性として、これらの研究がエスノメソドロジー・会話分析の研究そのものというよりも、それらを援用した社会的構築主義の立場からなされていることを指摘できるだろう。概念分析の受容は、社会的構築主義にエスノメソドロジー・会話分析の知見を織り込む筋道を家族社会学にもたらしたように見える。

方法論的な挑戦もなされる。テクストをデータとする研究が登場する。たとえば藤原信行（2011）は、各地の自治体が発行している自殺予防のためのパンフレットにおいて、家族が自殺を防ぐために何を期待されているのかを、成員カテゴリー化装置のアイディアを活かしながら検討している。また松木（2019, 2020）も、大手新聞の人生相談記事での浮気・不倫の語られかたを検討するにあたって、エスノメソドロジー・会話分析の知見を用いている。身近な人に打ち明けるわけにもいかないから投稿したという相談者の説明自体が、「結婚相手以外を好きになってはいけない、好きになるはずがない」という、ロマンティック・ラブ・イデオロギー、ひいては近代家族の理念に支えられて成り立っている（松木 2019）。

藤原（2012）はまた、自殺者とその遺族をめぐる研究の一環として、インタビューで得られた語りを検討してもいる。藤原（2012）は、警察によっては事故死と断定されたものの、地域住民からは「自殺」と捉えられている人物の死をめぐって、近親者へのインタビュー調査を行う。そのなかで近親者たちは、やはりそれは自殺ではないと主張するのだが、その論拠とされるのはその人物の死の直前の、自殺者らしからぬふるまいである。このことが、成員カテゴリー化分析の知見を活かしながら、整理されている。

エスノメソドロジー・会話分析のアイディアを用いて、家族社会学の理論的・学説史的な問題に挑む研究も登場する。松木（2013b）は、家族の定義をめぐる論争に対して、（やはり社会的構築主義を媒介させるかたちで）「インデックス性」（indexicality）や「参与者の指向」（participant's orientation）といったエスノメソドロジー・会話分析の概念を適材適所的に配置し、かの論争自体がナンセンスだという結論を導いている。これなどは、新たな研究手法やデータを用いるという意味での方法論的な挑戦ではなく、家族社会学のアポリアにエスノメソドロジー・会話分析の発想自体を武器に挑むという意味で、方法論による挑戦と位置づけるこ

とができるだろう。

4.2　会話分析にもとづく家族社会学的な研究の広がり

他方で、会話分析にもとづく家族社会学的な研究のほうでも、そのフィールドやトピックに広がりが生まれてきた。私は、子育てひろばでのやりとりを扱いながらも、近代家族的な「公私区分」がやりとりのなかで交渉される様子を検討したり（戸江 2013）、親が子どもをどう呼ぶのかを検討することで親子関係のありかたを検討したりする（戸江 2015, 2016）。また、2000年代後半から続けてきた子育てひろばでの研究を収めた著書（戸江 2018a）を出版する。個々の論文からは感じづらいエスノグラフィとしての厚みをもった本書は、子育てひろばという家族社会学的な対象に、フィールドワークにもとづく会話分析（戸江 2018b）から取り組むという、方法論的なスタンスを明示的に打ち出したものにもなった。

中川敦は、高齢者の遠距離介護にかかわるやりとりについて、会話分析の修練にもとづいた成果を相次いで発表しはじめる（中川 2015, 2016, 2018）。中川（2016）が扱うのは、介護を受けている高齢者をめぐって、介護している息子や娘などの家族と、ケアマネージャーやヘルパーなどの介護を支援する人たちが寄り集まって開く会議である。支援者たちからみて、介護を受けている当人にとって望ましい対処は、金銭面や労力面で家族に負担を強いるものとなる場合がある。息子や娘は、子どもとして親にとって最善の選択をすべきだという規範と、自分の生活を守ることの間で板挟みになる。その板挟みの状況は、もちろん支援者たちからも見てとれる。支援者たちはときに、娘の言い淀みからその意向を汲んで、彼女があからさまな拒絶をしないですむようにし、ときに協力しあって介護を受けている父親の状況を息子に伝え、納得してもらおうとする。

もうひとつ、家族社会学的な関心からの研究とはいえないが、家族の死をめぐる問題を扱っている研究として、川島理恵（2013）を挙げておきたい。これは、生存が危ぶまれる状態で救急治療室に運び込まれた患者への治療（継続）をめぐって医師と患者の家族との間で交わされる、文字どおりの意味で人の生死にかかわるセンシティブなやりとりを扱ったものだ。医師はまず患者がおかれた状況を説明する。心肺停止状態である。それでも医師はまだもう少し治療を試みたいと伝える。母親がほとんど死んでいるといってよい状態にあること、それでもなお医師が努力しようとしていることを知った娘は、「あまり無理なさらずに。母のためにもと私も思っていますから」と言う。つまり、医師は蘇生処置を止めるタイミングを家族の意向のもとに決めようとするのである。

先ほど紹介した私の研究（戸江 2015, 2016）は、現代日本社会を生きる人々にとって、親が子どもに対して担うことを期待されている役割がどんなものかを、やりとりの検討から詳らかにするものだった。これに対して中川の研究（2015, 2016, 2018）や川島の研究（2013）は逆に、子どもが親に対して負っている（と人々がみなしている）権利や責任を明らかにするものとなっているとも整理できるだろう[12)]。

かくして2010年代に至って、家族社会学（の経験的研究）にエスノメソドロジー・会話分析を導き入れる道はほぼ整備されたといってよい。すなわち、ある家族社会学的なテーマについ

て、研究対象となっている人々自身がそれを生み出すやりかたを剔出するという研究の進めかたである。たとえば、遠距離介護において介護の方針はどんなふうに決められるのか、そこに家族はどんなふうにかかわっているのかという問いを立てたとする。この問いに、介護される人とする人、そしてケアマネージャーが、介護される人の下痢止めの量をどんなふうに決めるのか、といった次元から会話分析は切り込むことができる。家族は、これらのやりとりの外ではなく、まさに誰がどう下痢止めの量を決めるのかというやりとりのただなかで立ち現れるだろう。たとえ血縁関係があっても、そしてたとえその場に居合わせても、だんまりと知らんぷりを決め込むことで、家族ではないかのようにふるまうことも、逆にできるはずだ。

追究可能な研究テーマはこんなふうに次々に創り出すことができるだろう。そして、そこからの成果を積み重ねていくことで、人々の日々の営みにおいて家族がどんな存在であるのか、逆からいえば人々のどんな日々の営みが家族らしさをつくり上げているのかが明らかになっていくだろう。それはとりもなおさず、家族「する」こと（doing family）や家族であることを「見せる」こと（displaying family）の研究（Finch 2001，Morgan 2011＝2017）を前進させることにもなるはずである。

5　2020年代へ――広大なフロンティア

エスノメソドロジー・会話分析の立場からの家族社会学的な研究、あるいは家族社会学的な研究にエスノメソドロジー・会話分析のアイディアを活かした研究は、この30年間で確かに増えてきた。取り組まれる研究テーマや取り組む方法論も広がりをみせた。他方で、その「主要登場人物」は全員足しても両手で足りる程度であり、その歩みは堅実だったかもしれないが、同時に緩慢なものだったことも間違いない。

改めて整理しておくと、まずは教育社会学者たちによる家庭での社会化の研究が進められ、家族社会学者たちは家族の定義を論じるなかでエスノメソドロジー・会話分析の知見を援用した（1990年代）。ついで、若手の家族社会学者たちが社会的構築主義を媒介してエスノメソドロジー・会話分析の知識を吸収し、データにもとづいた研究成果が出るようになった（2000年代前半）。エスノメソドロジー・会話分析を本格的に学んだ研究者たちが家族研究に着手しはじめた（2000年代後半）。家族社会学者たちがまとまった研究成果を出すようになり、ほぼ同じタイミングで概念分析の波が到来した。そして、データにもとづいたエスノメソドロジー・会話分析的な研究にテーマ的・方法論的な厚みが少し出てきた（2010年代）。

方法論的には、まずエスノメソドロジーそのものを紹介する作業があり、ほぼ同時に成員カテゴリー化装置のアイディアを用いた習作的なデータ分析が現れる。その後、会話分析を用いた研究も登場し、概念分析のインパクトを受け、その方法論は洗練・豊富化されていく。論文自体には表れなくても、この30年間に調査手法、もしくは録音・録画方法にも幾度かのブレイクスルーあるいは逆にロックダウンがあったはずである。収録機材は進化する一方、カジュアルに収録することは困難になった[13)]。

研究テーマという観点からみるなら、2010年代には家族支援をフィールドとする研究が大勢を占めている。それ以前に取り組まれていた、親子や夫婦のやりとりの研究は逆にあまりアウ

トプットが出ないという状況になっている。他稿（戸江 2020）で詳述したので、ここでの深入りは避けるが、そこにも大きな伸びしろがあるように思える。

本稿の冒頭に示したねらいに立ち返るなら、家族社会学におけるエスノメソドロジー・会話分析は――それなりの蓄積がなされてきたとはいえ――「これまでの研究の到達点を見定める」段階までには至っていないというべきだろう。先達が開拓したのはごく狭い地所にすぎず、目の前には漠々たる原野が広がっている。他方で、その野山を切り拓くための道具は30年前と比べて格段に向上している。この先に豊饒たる実りが待っているかどうか、それはやってみないとわからない。だが、フロンティア・スピリットをもった者たちの躍動する場が、ここにはある。

［謝辞］

草稿の段階で目を通していただき、コメントを寄せてくださった松木洋人氏と中川敦氏にお礼を申し上げる。また、仕上げの段階でご助力いただいた湯川純幸氏にも感謝の意を表する。ただし、本稿に残された瑕疵のすべてはいうまでもなく、その責めを私が負う。

［注］

1）山田富秋も、1998年に出版された「エスノメソドロジーの現在」と題する文章の冒頭で、「日本にエスノメソドロジーが本格的に紹介されてちょうど10年」と述べている（山田富秋 1998：72）。なお、現在では言及されることの少ない、だが当時は一定の影響力をもっていただろう、ケネス・ライターによる入門書、『エスノメソドロジーとは何か』（Leiter 1980＝1987）の訳書が刊行されたのも1987年と同時期だった。

2）これは、エスノメソドロジー・会話分析の研究者たちが、家族のメンバーどうしのやりとりを扱ってこなかったことを意味しない。家族の会話はむしろ、国内外を問わず、会話分析の主たるデータであり続けてきた。ただ、それらが家族社会学的な関心から検討されることが、ほとんどなかったのである（戸江 2020）。このことは、やりとりのしくみの解明をもっぱらの関心とする会話分析にとって自然なことである（戸江 2018b）。

3）したがって、本稿では海外におけるエスノメソドロジー・会話分析的な家族研究についてはふれない。その最新の動向については、戸江（2020）を参照してほしい。

4）家族社会学の論文ではないが、論文のタイトルに「家族」と「エスノメソドロジー」の両方が入ったものとしては、1991年には佛教大学の紀要に「エスノメソドロジーと家族療法――夫婦間のコミュニケーションの新しい視点に向けて」という論文が掲載されている（辻村 1991）。内容はタイトルどおり、家族療法にエスノメソドロジー・会話分析の知見と方法論は活かせるといったものである。この論文の末尾には、夫婦のカウンセリングのやりとりが登場し、それについての考察もなされているが、現時点からみればいささか曖昧なものである。なにより、そこに至るまでのほとんどの紙幅がエスノメソドロジー・会話分析（とアルフレッド・シュッツ）の基本的な主張の紹介に割かれている。

5）日本の教育社会学でエスノメソドロジー・会話分析が受容されていった経緯については、清矢良崇（1998）や北澤毅（2017）に詳しい。

6）この立場は、子どもの社会化と呼ばれる現象を、大人の文化による子どもの文化の同化と捉えるロバート・マッケイ（Mackay 1973）の立場に通じている。

7）ジェンダー論まで広げて考えるなら、日本のエスノメソドロジー研究の初期の代表的成果とされることが多い山崎敬一（1994）がまさにそうであるし、2000年代以降も鶴田幸恵（2009）、小宮友根（2011）などといった、まとまった成果が出ている。これらエスノメソドロジー・会話分析の立場からのジェ

ンダー論的な研究が、家族社会学に寄与する部分もまた大きいに違いないが、本稿の射程外である。

8）この点は、本稿の草稿に対する松木洋人氏のコメントにおける、松木氏自身の回想から示唆を受けた。

9）なお、2007年には上谷香陽が、小説（山本文緒の『あなたには帰る家がある』）のストーリーの検討から近代家族の理念について論じているが、そこでも成員カテゴリー化装置の発想が加味されている（上谷 2007）。

10）串田秀也はこの時期に、学童保育でのフィールドワークにもとづいて、会話分析的な研究を行い、報告書（串田 2002）といくつかの論文（串田 2003, 2005）を執筆しているが、これらが家族社会学の具体的な研究成果を生み出すには至らなかったようだ。もっとも、これらの論考自体も家族社会学的な位置づけをもってはいない。

11）ちなみに、エスノメソドロジーにも言及がある海外の家族社会学の教科書、『家族ライフスタイルの社会学』の和訳が出版されたのもこの時期である（Cheal 2002＝2006）。2017年に和訳が出た『家族実践の社会学』にもエスノメソドロジーへの言及が見られる（Morgan 2011＝2017）。

12）家族社会学的な関心からなされたものではないが、子育て（高田ほか編 2016）や介護（Backhaus・鈴木 2010）といった、その重要な研究トピックにかんする会話分析的な研究は存在する。川島（2013）を親に対する子どもの責任の相互行為的な例証として位置づけることができるように、これらの研究成果もまた読みかたしだいでは家族社会学に資するものとなりうると思う。

13）また、エスノメソドロジー・会話分析と家族社会学の人的交流が進んだことで、近年では協力して研究を進める取り組みも見られるようになった。日本家族社会学会は定期的にアンケート調査の全国家族調査（NFRJ）を実施しているが、2019年のNFRJ18ではそこにインタビュー調査が連結され、そこからさらに協力を申し出てくれた人たちを対象に、ビデオカメラを用いて家庭での普段の暮らしを収録する調査、「暮らしの記録調査」が進められている。

［文献］

Backhaus, Peter・鈴木理恵，2010,「起きる時間――施設介護における承認獲得」『社会言語科学』13(1)：48-57.

Cheal, David, 2002, *Sociology of Family Life*, New York: Palgrave Macmillan.（＝2006，野々山久也訳『家族ライフスタイルの社会学』ミネルヴァ書房.）

Finch, Janet, 2007, “Displaying Families,” *Sociology*, 41(1): 65-81.

藤原信行，2011,「『医療化』された自殺対策の推進〈家族員の義務と責任〉のせり出し――その理念的形態について」『生存学』3：117-32.

――――，2012,「非自殺者カテゴリー執行のための自殺動機付与――人びとの実践における動機と述部の位置」『ソシオロジ』57(1)：125-40.

Garfinkel, Harold, 1967, “Passing and the Managed Achievement of Sex Status in an ‘Intersexed’ Person Part 1,” Harold Garfinkel, *Studies in Ethnomethodology*, Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 116-85.（＝1987，山田富秋・好井裕明・山崎敬一訳「アグネス、彼女はいかにして女になり続けたか――ある両性的人間の女性としての通過作業とその社会的地位の操作的達成」ハロルド・ガーフィンケル／ハーヴィー・サックス／メルヴィン・ポルナー／ドロシー・スミス／ローレンス・ウィーダー『エスノメソドロジー――社会学的思考の解体』せりか書房，215-95.）

Gubrium, Jaber F. and James A. Holstein, 1990, *What is Family?*, Mountain View: Mayfield Publishing.（＝1997，中河伸俊・湯川純幸・鮎川潤訳『家族とは何か――その言説と現実』新曜社.）

Hester, Stephen and Eglin, Peter eds., 1997, *Culture in Action: Studies in Membership Categorization Analysis*, Lanham: University Press of America and International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis.

石飛和彦，1996,「『しつけ会話』のエスノメソドロジー――社会化理論とそのメタ理論」『教育・社会・文化』3：1-22.

樫田美雄，2001,「エスノメソドロジー的アプローチ」野々山久也・清水浩昭編『家族社会学の分析視角

――社会学的アプローチの応用と課題』ミネルヴァ書房，122-37.
――――・寺嶋吉保，2003,「インフォームド・コンセントに家族はどのように関わっているか――エスノメソドロジー的検討」『社会学年誌』44：33-55.
川島理恵，2013,「救急医療における意思決定過程の会話分析――インフォームド・コンセント運用の1例として」『社会学評論』64(4)：663-78.
木戸功，1994,「家族の実践的アプローチ序説」『ヒューマンサイエンスリサーチ』早稲田大学大学院人間科学研究科，4：171-83.
――――，1996,「それは家族であるのか、家族ではないのか、ではどうすれば家族であるのか――『家族』とその状況規定」『家族研究年報』21：2-13.
――――，2010,『概念としての家族――家族社会学のニッチと構築主義』新泉社.
――――・松木洋人，2003,「ふつうに家族であることを成し遂げる――家族生活の組織化と成員カテゴリー化分析」『社会学年誌』44：15-31.
木下衆，2019,『家族はなぜ介護してしまうのか――認知症の社会学』世界思想社.
北澤毅，2017,「教育社会学における質的研究の展開――質的研究における一般化問題を考えるために」日本教育社会学会編『教育社会学のフロンティア 1 学問としての展開と課題』岩波書店，127-44.
小宮友根，2011,『実践の中のジェンダー――法システムの社会学的記述』新曜社.
草柳千早，1998,「『夫婦別姓』をめぐる言説と『現実』」山田富秋・好井裕明編『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房，170-86.
串田秀也，2002,『対人サービス組織における「規則語り」の会話分析的研究――学童保育を事例として』1999-2001年度科学研究費補助金研究成果報告書，大阪教育大学.
――――，2003,「注意と抵抗――保育場面における規則の実際的利用」『公民論集』大阪教育大学，12：77-99.
――――，2005,「子どものトラブルのコントロール――相異なる事実描写の実際的整序」宝月誠・進藤雄三編『社会的コントロールの現在――新たな社会的世界の構築をめざして』世界思想社，381-96.
Leiter, Kenneth, 1980, *A Primer on Ethnomethodology*, New York: Oxford University Press.（＝1987，高山真知子訳『エスノメソドロジーとは何か』新曜社.）
MacKay, Robert W., 1973, “Conceptions of Children and Models of Socialization,” Hans P. Dreitzel ed., *Childhood and Socialization: How Children Interact with Adults in the Family, the Commune, and the School*, New York: Macmillan Publishing, 27-43.
松木洋人，2001,「社会構築主義と家族社会学研究――エスノメソドロジーの知見を用いる構築主義の視点から」『哲学』三田哲学会，106：149-81.
――――，2005,「子育て支援サービスを提供するという経験について――ケア提供者の語りにおける『子ども』カテゴリーの二重性」『家族研究年報』30：35-48.
――――，2007,「子育てを支援することのジレンマとその回避技法――支援提供者の活動における『限定性』をめぐって」『家族社会学研究』19(1)：18-29.
――――，2012,「ひろば型子育て支援における『当事者性』と『専門性』――対称性を確保するための非対称な工夫」『福祉社会学研究』9：142-62.
――――，2013a,『子育て支援の社会学――社会化のジレンマと家族の変容』新泉社.
――――，2013b,「家族定義問題の終焉――日常的な家族概念の含意の再検討」『家族社会学研究』25(1)：52-63.
――――，2014,「構築主義的家族研究の可能性――アプローチの空疎化に抗して」渡辺秀樹・竹ノ下弘久編『越境する家族社会学』学文社，124-38.
――――，2019,「配偶者の婚外性愛についての相談に対する回答を可能にする規範的論理――新聞紙上の人生相談を題材とした探索的分析」『比較家族史研究』33：116-34.
――――，2020,「自分の婚外性愛についての相談／回答はどのように成し遂げられるのか――新聞紙上の人生相談記事を題材とした探索的探究」『家族研究年報』45：79-96.
Morgan, David. H. J., 2011, *Rethinking Family Practices*, New York: Palgrave Macmillan.（＝2017，野々山久也・

片岡佳美訳『家族実践の社会学――標準モデルの幻想から日常生活の現実へ』北大路書房.）
中川敦，2015,「遠距離介護者は何をしてるのか――提案の判断と離れて暮らす家族の知識」『総合政策論叢』島根県立大学，29：29-44.
―――，2016,「遠距離介護の意思決定過程の会話分析――ジレンマへの対処の方法と責任の分散」『年報社会学論集』29：56-67.
―――，2018,「遠距離介護における SNS を用いた遠隔コミュニケーションの会話分析的研究」『福祉社会学研究』15：217-39.
野々山久也・清水浩昭編，2001,『家族社会学の分析視角――社会学的アプローチの応用と課題』ミネルヴァ書房.
Parsons, Talcott, Robert F. Bales, James Olds, Morris Zelditch, Jr. and Philip E. Slater, 1956, *Family: Socialization and Interaction Process*, London: Routledge.（＝2001，橋爪貞雄・溝口謙三・高木正太郎・武藤孝典・山村賢明訳『家族――核家族と子どもの社会化』黎明書房.）
Pollner, Melvin, 1975, "'The Very Coinage of Your Brain': The Anatomy of Reality Disjuncture," *The Philosophy of the Social Sciences*, 5: 411-30.（＝1987，山田富秋・好井裕明・山崎敬一訳「お前の心の迷いです――事実報告のアナトミー」ハロルド・ガーフィンケル／ハーヴィー・サックス／メルヴィン・ポルナー／ドロシー・スミス／ローレンス・ウィーダー『エスノメソドロジー――社会学的思考の解体』せりか書房，39-80.）
Sacks, Harvey, 1972a, "On the Analyzability of Stories by Children," John J. Gumperz and Dell Hymes eds., *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*, New York: Holt, Rinehart and Winston, 325-45.
――――――, 1972b, "The Usability of Conversational Data," David Sudnow ed., *Studies in Social Interaction*, New York: Free Press, 31-74.（＝1989，北澤裕・西阪仰訳「会話データの利用法――会話分析事始め」ジョージ・サーサス／ハロルド・ガーフィンケル／ハーヴィー・サックス／エマニュエル・シェグロフ『日常性の解剖学――知と会話』マルジュ社，93-173.）
酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生編，2009,『概念分析の社会学――社会的経験と人間の科学』ナカニシヤ出版.
――――・――――・――――・――――・小宮友根編，2016,『概念分析の社会学 2――実践の社会的論理』ナカニシヤ出版.
清矢良崇，1994,『人間形成のエスノメソドロジー――社会化過程の理論と実証』東洋館出版社.
――――，1998,「教育社会学とエスノメソドロジー」山田富秋・好井裕明編『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房，238-51.
田渕六郎，1996,「主観的家族論――その意義と問題」『ソシオロゴス』20：19-38.
高田明・嶋田容子・川島理恵編『子育ての会話分析――おとなと子どもの「責任」はどう育つか』昭和堂.
戸江哲理，2008a,「糸口質問連鎖」『社会言語科学』10(2)：135-45.
――――，2008b,「乳幼児をもつ母親の悩みの分かち合いと『先輩ママ』のアドヴァイス――ある『つどいの広場』の会話分析」『子ども社会研究』14：59-74.
――――，2009,「乳幼児をもつ母親どうしの関係性のやりくり――子育て支援サークルにおける会話の分析から」『フォーラム現代社会学』8：120-34.
――――，2011,「なぜ通い続けるのか？――ある子育て支援サークルの 2 つの利用のしかた」『京都社会学年報』19：1-22.
――――，2012,「会話における親アイデンティティ――子どもについての知識をめぐる行為の連鎖」『社会学評論』62(4)：536-53.
――――，2013,「晩ごはんのひとり言――相互行為における公私区分とその交渉」『家族研究年報』38：109-28.
――――，2015,「母親が子どもを『これ』と呼ぶとき――母親による子どもに対する指示の会話分析のための小論」『女性学評論』神戸女学院大学女性学インスティチュート，29：71-89.
――――，2016,「例外扱いする特権――母親による子どもに対する『この人』という指示」『社会学評論』

67(3)：319-37.
————, 2018a,『和みを紡ぐ――子育てひろばの会話分析』勁草書房.
————, 2018b,「会話分析とフィールドワーク――やりとりのしくみの解明と社会的世界の解明」平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実編『会話分析の広がり』ひつじ書房, 127-62.
————, 2020,「家族『する』ことの研究とエスノメソドロジー・会話分析――会話分析的研究 *Embodied Family Choreography* の会話分析的意義」『家族研究年報』45：97-109.
辻村慶子, 1991,「エスノメソドロジーと家族療法――夫婦間コミュニケーションの新しい視点に向けて」『佛教大学大学院紀要』19：1-21.
鶴田幸恵, 2009,『性同一性障害のエスノグラフィ――性現象の社会学』ハーベスト社.
上谷香陽, 2007,「『近代家族』の概念実践――日本語版『名前のない問題』のアポリア」『応用社会学研究』49：163-73.
山田昌弘, 1992,「『家族であること』のリアリティ」好井裕明編『エスノメソドロジーの現実――せめぎあう〈生〉と〈常〉』世界思想社, 151-66.
山田富秋, 1998,「エスノメソドロジーの現在」山田富秋・好井裕明編『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房, 72-87.
山崎敬一, 1994,『美貌の陥穽――セクシュアリティのエスノメソドロジー』ハーベスト社.

（原稿受理日　2021年３月11日）